

カンボジア投資環境視察ミッション報告

(2009年2月1日－7日)



カンボジア開発評議会（CDC）での意見交換



ソック・アン・カンボジア副首相
兼閣僚評議会担当大臣表敬訪問

日本アセアンセンターは、カンボジア開発評議会と共催で、2009年2月1日から7日までカンボジアへ投資環境視察ミッションを派遣した。同ミッションでは、ソクアン副首相、カンボジア開発評議会との意見交換を行った他、カンボジアの新しい経済回廊(南部海岸回廊)と物流ルート視察をテーマとして、バンコクから出発し、タイのレムチャバン港、カンボジアとタイの国境に位置するコックコン経済特区、プノンペン及びシハヌークビル経済特区、ベトナムとカンボジア国境にあるマンハッタン経済特区の視察を行った。

1. 訪問先概要

(1)レムチャバン港

1991年、バンコク南東130kmのチョンブリ県シーラチャに開港。タイ港湾庁(PAT)が管轄する深海港。水深は14m、5万重量トンの大型港の入港が可能。タイ最大のコンテナ取扱量港であり、東南アジアでの最も最先端の設備を有する港湾の一つで、同地域における海外貿易の最重要拠点。敷地面積1,014ha、バース数11、バース延長2,512m。取扱貨物の80%は、コンテナ貨物。フェーズ1で、A1-5、B地区を開発したが、取扱量が増加し現在のキャパシティでは不十分になってきたため、フェーズ2でC地区、D地区を中国・香港系デベロッパー「ハチソン・ワンポア」が開発中。

(2)コックコン州副知事

コックコン州は、プノンペンから一番離れたカンボジアの南西部のタイ国境に位置している。山が多く、平野が少ないため、稲作は少なく、サトウキビ生産と漁業が中心。コックコン州には、マングローブの森が沢山あり、珊瑚が美しい浜辺もあることからエコ・ツーリズムに力を入れている。国道9号線は、昨年5月に開通したばかり。

(3) コッコン経済特区

コッコン経済特区は、カンボジアの5大財閥の一つのLYPグループが開発。LYPグループは、飲料会社、タバコ会社、カンボジア最大の電力会社、ホテル開発会社、インフラ開発会社を傘下に持つ。コッコンでは、1997年に1億ドルを投資し、リゾートを開発。タイ、ベトナム、中国、マレーシアからからの顧客をターゲットにカンボジアで最初のカジノを開発し、カジノと併設して545室のホテルを建設した。

経済特区は、敷地面積350haで、シハヌークビル港から200km、タイのレムチャバン港から330kmのところの位置する。電力はタイから購入しているが、LYPグループ傘下に電力会社を持っていることから、電力料金を安価で提供することができる(プノンペン経済特区の約半分の金額)。その他、リース料、水道料金も他の経済特区よりも安く、操業コストは低いことがコッコン経済特区の魅力である。コッコン経済特区に、韓国・現代自動車が進出を予定しており、当初の計画では、2008年末に着工予定であったが、経済危機とカンボジア政府との投資恩典の交渉が長引いていることから、2009年末に延期された。

(4) シハヌークビル港公社

シハヌークビル港のOld Jettyは、1960年、New Quayは、1969年、コンテナ・ターミナルは、2007年より供用を開始し、24時間、365日開港している。シハヌークビル港は、シンガポール港及び香港の2大ハブポートを通じて世界と繋がっており、道路ネットワークは、国道(4号線、2号線、48号線)、鉄道(シハヌークビルプノンペンパイリン)で結ばれている。今年から国際港湾保安コードに対応したカンボジアで初の本格的なコンテナ・ターミナルが稼働予定。

また、同港に隣接するシハヌークビル港特別経済区は2009年7月よりから建設を開始し、2011年7月完成を目標としている。実施主体は公的機関(シハヌークビル港公社)であり、制度面でのバックアップを始めとする様々な便益の提供が期待できる。同経済特区の総面積は70haで、ワンストップ・サービスを導入し、港と経済特区が一体となった保税地域になる予定。

(5) カンボジア開発評議会(CDC)

2004-2008年のカンボジアへの投資は、セクター別では、観光業への投資が一番多く、繊維産業、サービス業、農業と続く。国別では、マレーシア、中国、韓国からの投資が多いが、今年度は、水力発電のプロジェクトを進めている中国が最大の投資国となっている。韓国からは、IT、観光、インフラ、不動産への投資が多い。日本は最大の援助国であるが、1994-2008年のカンボジアへの投資額は、10位。2005年12月SEZ制度が制定され、これまで21ヶ所の経済特区を承認した。そのうち、マンハッタン、プノンペン、タイセンの3つの経済特区が稼働中。カンボジア開発評議会(CDC)は援助受入れ及び投資促進業務を行っており、CIBが投資促進、CRDBが援助調整を行っている。CDCはワンストップ・サービスを提供しており、投資申請者に代わり、条件付投資プロジェクト登録証明書に記載された関連省庁から要請のある必要なライセンスを取得することができる。カンボジア政府は、市場開放に向けた努力をしており、外国人投資家に対してカンボジア人と同じ権利を付与しており(土地の購入を除く)、本国への利益送

金も可能である。シハヌークビルには、カンボジア唯一の深海港であるシアヌークビル港や、拡張工事が完了したシハヌークビル国際空港があることから、5年以内には急速な経済発展が進み、カンボジア全体の経済を牽引していくことが期待される。

(6) ソクアン副首相

さきほどまで、フンセン首相と共に、「経済フォーラム」に出席していた。本フォーラムでは、カンボジア政府、世銀、UNDP等の国際機関/ドナーが集まり、今後のカンボジアの経済につき議論をしている。カンボジアの金融は、政府が慎重な政策を打ち出してきたことが功を奏し、世界経済の影響をそれほど受けていないが、銀行・金融業への対策をこれから検討する。カンボジア政府として投資を奨励している分野は、農業、観光業、天然資源開発、労働集約的産業である。現在の労働集約的産業は、縫製業が中心。また、カンボジアでは、人口の80%が農業に従事しており、依然として農業は重要な分野である。現在、製造業の原材料はほとんど全て輸入に頼っているが、今後は、部品等も調達できるよう裾野産業育成のために、人材を育成することが重要であると考えている。

2. 企業訪問ならびに特別経済区視察概要

(1) プノンペン特別経済特区(PPSEZ)

プノンペン空港から約8km、プノンペン市から18km、シアヌークビル港から約207kmに位置するプノンペン特別経済区は、日本企業とカンボジア華人系企業の合弁会社により建設された。第1期工業地区は、2008年4月に141haが竣工し、シンガポール企業(プラスチック容器製造)、マレーシア企業2社(ワイヤーメッシュ製造、砂糖パッキング)、台湾企業3社(縫製、ハンガー製造、ダンボール製造)、韓国(アクセサリ製造)、日本企業2社等の十数社が入居している。同経済区には、ワンストップ・サービスや輸出加工区、ドライポート、電力発電所といったインフラ整備に加え、住居・商業地域の開発も進めている。ワンストップ・サービスセンターは、2008年9月より運用を開始しており、輸出入の通関手続きをワンストップで行うことができる。

(2) マレーシア系縫製工場

100%マレーシア資本で、3つの工場を持つカンボジアにおける最大の衣料品輸出企業の一つである。カンボジア工場では、裁断、プレス・包装・検査を含む最終製品化、縫製を行っている。主要製品は、パンツ、ポロシャツ、パジャマ、ジャケット、フリース、ジャージ等。原材料は、中国、台湾、ベトナム、マレーシア等から100%輸入し、輸出先は、米国、EU、日本。

カンボジアに進出した理由は、進出当時、マレーシア国内での生産が追いつかなくなり、マレーシア政府から東アジアに進出するよう奨励と恩典があったこと、従業員の確保が容易で、人件費が安く、米ドルで決済ができるため為替リスクがないことが挙げられる。



(3) アンコールビール工場

1968年にビール工場を設立し、パイヨンとアンコールビールを製造していたが、1975年に内戦の影響を受け、工場を閉鎖した。1991年にマレーシア資本100%で出資し“Cambrew Ltd”を設立し、カンボジア政府と60年リース契約を結んだ。2005年にカールズバーグと合弁(50%カールズバーグ、50%マレーシア)。工場では、ボトル、カン、ドラフトビールを生産。生産能力は、4-6万ケース/日。95%は国内向け、5%は、輸出。原材料は、オーストラリア、ドイツ、フランス、マレーシア等から輸入。カンボジアでは電力が安定していないため、自家発電を使用している。ビール醸造で重要なのは、水とブランド力であり、水質のよさからシハヌークビルに着目した。

(4) マンハッタン特別経済区(Manhattan Special Economic Zone)

台湾とシンガポール企業の合弁により設立された経済特区。ベトナム国境に隣接するバベットに位置し、ホーチミン国際空港まで65km、サイゴン港まで80km、プノンペンまで190kmの好立地にある。現在、台湾、中国、米国、ロシアの4社の工場が稼働中で、新たに香港、台湾、中国系企業5社が工場を建設中。同SEZ内にワンストップ・サービスを設け、原産地証明書の取得を始めとする全ての手続きを済ませることができる。カンボジアは、特惠関税制度を利用できるため国際市場へのアクセスに大変有利であり、豊富で低廉な労働力が大きな魅力である。同SEZの周辺人口は65万人で、そのうち労働人口は9万人程度である。また、電力はベトナムから買っているため安定供給が可能である。

2. 全体の印象

タイ(バンコク)からカンボジア(コッコン、シハヌークビル、プノンペン)を經由して、ベトナム(ホーチミン)までの1,140kmを走行した。タイのレムチャバン港からタイ・カンボジア国境のコッコン経済特区までは、約330kmで、バスでの所要時間は、約5.5時間。ホーチミンから、ベトナム・カンボジア国境のマンハッタンまでは、約70kmで、約2時間程度である。本ミッションでは、国境を跨ぐ道路インフラが急速に整備されつつあることを実感した。参加者からは、これまでア

クセスしにくかった南部海岸回廊の状況を把握することができたこと、また情報が限られていたコックンの経済特区の現状を知ることができたと高い評価を得た。カンボジアは日系企業の集積が進むバンコクとホーチミンをつなぐ地政学的な優位性を有し、2008年4月に南部海岸回廊が完成し、2012年に南部経済回廊が開通予定である。カンボジアから周辺国へのネットワークが広がったことにより、物流リードタイムが短縮されることから、今後さらにカンボジアへの注目が高まると思われる。

以上